

## 巻頭言

## ルワンダ共和国での灌漑施設改修計画と技術者

飛鳥建設株式会社 代表取締役社長

乗京 正弘  
のりきょう まさひろ

皆さん、「ルワンダ共和国」という国をご存じでしょうか？

「ルワンダ共和国」は、東アフリカに位置し、ウガンダ、タンザニア、コンゴ民主共和国に挟まれた小国です。国土は日本の四国と同じくらいの大きさで、人口約一、一〇〇万人、中心産業は農業で、コーヒーやお茶を輸出しています。今年開催されたパリオリンピックには八名の選手を派遣しましたが、メダルは残念ながらゼロに終わりました。

「ルワンダ共和国」も多くのアフリカ諸国と同じように内戦に苦しみました。

特に、一九九四年の大虐殺では、一〇〇日間でおよそ八〇万人が虐殺されたといわれています。

二〇〇〇年以降、現在のカガメ大統領が就任してからは「ＩＴ立国」を標榜し、アフリカの中でも先進的な国の一つに数えられるようになってきました。

当社と「ルワンダ共和国」との関係は、二〇一九年二月の「ルワマガナ郡灌漑施設改修計画」から始まりました。

この工事は、アースダムを築造（二か所の嵩上げ、一か所の新設）し、農業用水路を建設するもので、地域の稲作耕地面積の増大・収量増加を目的とするものです。

堤体は現地の材料を締固めて遮水性と強度を確保しますので、品質管理・施工管理が重要となります。そこで当社は、現地施工部隊に加え、ダム総括管理技術者であり、特にフィルダムに造詣の深い専門技術者を派遣しました。

まず、現地材料が盛土材として適正であるかの確認として、密度

試験、粒度試験、含水比試験等を行い、材料粒度曲線を定め、最適含水比を定めました。それに加え、確認法として手で触った触感、そして、味の確認を現地で指導しました。

そして、必要土量が確保できるか否かの確認もしました。

試験盛土を行い、使用する重機の状況を確認し、転圧機械、転圧回数、一層の盛土厚を定めました。

これらとともに、特記事項を盛り込んで築造全体の仕様を決定し、工事を開始しました。

二〇二〇年一月には「ルワマガナ郡灌漑施設改修計画」の現場視察を行い、順調な進捗状況を確認しました。ルワンダ日本国大使公邸を訪問し「プロジェクトの品質管理・工程管理のレベルの高さをルワンダ政府にアピールし、今後の開発案件につなげたい」とのお言葉をいただきました。

日本から一二、〇〇〇kmも離れた地でもやはり、政府、発注者、工事関係者や現地の方々との「心からのコミュニケーション」が重要だとあらためて感じています。

今、日本では「灌漑施設としてのダム」の建設はほとんど行われていません。

その影響もあり、現場で生きた品質管理ができる技術者が激減しています。いざという時に、必要な施設が造れないという危機です。そこで、技術の伝承も含め、必要最小限のアースダムを築造し続ける事が、日本の未来のためにも必要であるということを提言し、巻頭言とさせていただきます。